

## 粉河寺縁起の中世的再編

『粉河寺御池海岸院本尊縁起』と

和泉山脈山麓地域の宗教文化

大橋 直義

応永二六〜七年(一四一九〜二〇)に根来寺で書写された延慶本『平家物語』第五末(巻十)には、屋島内裏を出奔した平維盛が高野山から熊野へ向かう途上、粉河寺に赴き、寺内諸堂を巡礼したという独自の一章段が載る。この章段で永仁五年(一二九七)建立・供養の大門に言及していることから、現存延慶本の親本がやはり根来寺で書写された延慶二〜三年(一二三〇九〜一〇)の直前にこの記事が成立し、『平家』の一部となったものとして注目を集めてきた(武久一九七六)。そのような経緯に加えて、「和文縁起」(『粉河寺縁起并靈驗記』【4】等)から法懷大徳伝(廿八)・石崇上人伝(廿五)・公舜法印伝(卅一)を引用して、それぞれ高野大師(空海)・日吉山王・熊野権現の勧めによって粉河寺参詣を発願した先例と位置づけようとする。こと、湯浅の住人である藤原宗永が献じた八重桜(和文縁起十三。谷口二〇〇四)、花山院詠(同六。結句「長キ夜ノ夢」で延慶本は書陵部本「和文縁起」に同。新拾遺和歌集一四五)「修行せさせたまふける時粉河の観音にて御札にかかせ給うける御歌／花山院御製」及び統群書類従本は「後の夜のやみ」にも言及するなど、興味深い記事である。

中でも「其日、粉河へ詣給。先大門ヲ指入テ最初出現之靈輻御池ヲ拝給へバ、童男大伴之影像、御堂」左

右ニ立給へリ」カクテ放光瑞相之勝地根本精舎へ詣

給。見レド、庭上ヲ藤原宗永ガ」とする平維盛の諸

堂巡礼の経路に注意したい。「粉河寺四至伽藍図」

【36】、「粉河寺参詣曼荼羅」【74・79】によって確認

されうる室町期以後の堂宇の位置関係からすれば、

大門を通り抜けて御池坊に詣で、その後には本堂に向

かうとする一行の巡礼次第はいかにも実態に即して

いる。しかしながら、延慶本『平家』及び「和文縁起」

が参照する『粉河寺大率都婆建立縁起』【参考1】が

述べる仁範の寺内巡礼においては、「已顕現」している

「光明地」(現 本堂。漢文縁起)・「宝鐸地」(現 十

禅律院。和文縁起廿六)と、「猶隱蜜」である「距木

地」(大榎。漢文縁起)・「出現地」(現 御池坊。和文

縁起十一)とからなる「四勝地」を寺内に点じ、その

上で「出現地」に大率都婆を建立したとしている。つ

まり延慶本『平家』は、『建立縁起』に依拠しながら

も、そこに明示されている次第とは異なる順序での諸

堂巡礼を平維盛に行なわせているのである。

仁範の巡礼から維盛のそれへの転換に関して、大き

な示唆を与えてくれるのが『粉河寺御池海岸院本尊

縁起』【33】である。先年、稿者は、本絵巻の下絵【34】

と東京大学史料編纂所蔵「粉河寺旧記」が謄写する

天明七年(一七八七)奥書本とを検証し、翻刻・解

題を付した(大橋二〇一八)。この絵巻については、明

治四五年(一九二二)刊『西園』粉河靈刹の葉』に「御池

坊宝物」として「御池海岸院絵縁起 書画共筆者不

詳」とある一方、文化七年(一八一〇)写「粉河寺旧

記控」【73】の「御池坊什物類」には立項されない。こ

のことから、前稿では、天明七年を隔たらない一八世

紀末に下絵が制作されたものの浄書されるには至ら

ず、下絵である故に文化七年六月の寺社奉行への報

告には言及されなかったと見た。しかし、今回、本画

二軸が本展の準備段階で発見されたことで、少なく

とも本画の制作は文化七年六月以降、一九世紀前期

のことであったと訂正を加えたい。なお、本画と下絵

の関係について、特に巻上の第一画から第三画までに

大きな相違がみられる他、図様の異同を確認でき

る。この点、後考が俟たれるが、ただし縁起内容に相

違はなく、特に詞書本文については部分的に真名仮

名の置換が見られるものの、字配りをも等しく書写

しようとする意図が明白である。

さて本絵巻は、粉河寺本尊とそれを造像した童

男行者が同体であること、御池(出現地)が粉河寺の

根源であるゆえに「まづこ、(御池坊)に詣で、次に

金堂(本堂＝光明地)にあゆみならば「すものである

」と述べる(巻上・第四段)。延慶本が言及する「御

池」(そばの「御堂」左右)に立つ「童男大伴之影像」と

いう構図は、「千手観音二十八部衆及び童男行者・

大伴孔子古像」【10】と同様、「本尊縁起」が主張する

「粉河寺本尊＝童男行者」説が前提とならねば機

能しない。さらに、「本尊縁起」巻上では童男行者が

登場する「和文縁起」三・九・十一・廿四・廿五お

よび「漢文縁起」佐大夫説話を参照し、また『粉河

寺発基以来記』「童男大士御自作并信濃に通ひ給ふ

事」の類同話を引いており、両者の方法的類似をも

併せ考えるなら、延慶本の粉河寺巡礼記事との近さ

にますます注意されるのである。

では、いつごろからこのような縁起言説が生じてき

たのか。巻下「粉河寺御池海岸院童男行者縁起」は、

文明一八年(一四八六)の御池坊童男堂の火災と由

良興国寺管内に安置されていた童男行者像の真像

の帰還を物語り、翌長享元年(一四八七)御池坊の

告には言及されなかったと見た。しかし、今回、本画

再建によって結ばれる(最後の絵が「餅まき」の場面であることも面白い)。本絵巻が上下巻で内題を異にすること、加えて「和文縁起」等の既存の縁起資料を引用・参照しつつ独自の御池坊理解を示す上巻と、文明一八年春の御池坊童男堂の火災から真像の帰還までを具体的な日時に言及しながら叙述し、『粉河寺旧記』(天英本)【35】文明一四年六月一四日条等によって実在を確認できる「御池頼舜」を始め、「北田三郎大夫定清」や十穀坊聖「覚音」らを色鮮やかに描く下巻との間の方法の相違を念頭に置くなれば、両巻が異なる段階で成立した蓋然性は高い。この点、前稿で簡説したように、巻下の内容が成立するのは長享元年からさほど隔たらない一五世紀末期と見るべきだが、延慶本『平家』における粉河寺・御池坊理解とも共通する上巻の内容は、御池坊が一山を支配し、安定的に寺家執行・学頭を継承し始める以前の応永年間に形成されたと考えられる。なお、このことから逆に、延慶本『平家』に粉河寺巡礼記事が置かれたのは一四世紀初頭とする従来説を修正する必要があるのだが、この件については別に稿を改めることにする。

永享二年(一四三〇)頃に粉河寺の寺域から移転した誓度院は、一三世紀末期以後、覚心門流が止住する興国寺末の禅院となっていた(大石二〇〇四)。殊に応永年間の粉河寺と法燈派との関わりについて言えば、耕雲(花山院長親/子晋明魏)の存在に注意される。足利義満の晩年以後、特に義持期における歌道師範・古典学者であった耕雲は、『靈巖寺縁起』『衣奈八幡宮縁起』『紀州由良鷲峯山法燈円明国師之縁起』といった紀州・法燈派に関わる諸寺社の縁起の制作・改作に従事してもいた。その動向についてもやは

り稿を改めるが、小稿において重要なのは応永三三年(一四二六)に足利義持が粉河寺本尊戸帳を奉納するに際して「御願旨趣」を執筆している点である(『満濟准后日記』四月三日・一〇日・二〇日条)。もちろんこの出来事を以て、応永年間の縁起再編への耕雲の関与を証することはできないが、その可能性については留意しておく必要があるのではないか。なお、宮内庁書陵部蔵後崇光院貞成親王筆『粉河寺縁起』に合写される「粉河寺統験記」にこの時の願文が示されるが、建武三年(一二三三)三月、足利尊氏が戸帳を奉納した際に玄恵法印によって起草されたとされる願文では「千手千眼観世音菩薩并侍者童男部類眷属二十八部衆」として童男行者を観音の「侍者」と位置づけている一方、耕雲による願文では「観自在尊数多眷徒四七部衆」とするのみで、童男行者と観音との関係に変化が生じているかにも読める(義教代の永享三年一〇月の願文においても同様)。

法燈派との関わりという点では、巻下の内容がさらに重要であろう。童男行者の真像が安置されていた由良の「岡の堂」が興国寺の管掌下にあったと読めることはもちろんだが、「河原といへる山里」に住する「北田三郎大夫定清」の家系が無本覚心の弟子である至一の母の家系であると伝承されているのである(『紀伊統風土記』那賀郡猪垣村「廢誓度寺」)。至一とその母を祀る宝篋印塔の所在する西河原村の釋尊寺には応安元年(一三六八)中巖圓月贊「至一上人像」【48】等の至一に関わる寺宝が伝来するが、加えて『統風土記』には「粉河御池坊童男佛の縁起あり。巻尾に「文明十九年、河原北田定清」と書す。書法善し。定清は至一上人の母家北田三郎大夫の後といふ」と記録されている。文明十九年(一四八七)

の「縁起」は現存しないものの、『統風土記』が編纂された江戸後期には伝存していたようだ。

この至一を『太平記』卷三六に見える「外法成就の志一上人」と同一視するのが、禅徳寺蔵寛文三年(一六六三)写「犬鳴山七宝瀧寺記」である。本書には釋尊寺蔵「至一上人像」への言及が見られると共に、正平一七年(一二三二)に犬鳴山七宝瀧寺を再興したのが志一であるとする伝が見えている。これに先立つては、志一上人が植えた樹に言及する七宝瀧寺蔵(室町後期)写「葛城峯中之宿次第深秘記」があるが、現状では七宝瀧寺所蔵資料にこれを遡る志一(至一)伝承を見いだすことはできない。ただ、九条政基が文龜二年(一五〇二)に書写した九条家旧蔵『七宝瀧寺縁起』には、嘉慶年中(一三八七〜八九)に伽藍を修造した「大歇禅和尚」すなわち大歇勇健(一三二九〜八六)の名が見えている。大歇は、その伝に拠れば「紀之粉河大慈住持」である高山慈照(覚心資。「大慈」は未審)を師とし、建仁寺・大雄寺に参じた後に「大慈」住持となった法燈派の禅僧である。「大吠山」(犬吠つまり犬鳴か)との往還にも言い及ぶなど、中津川行者堂(極楽寺)にも比肩する葛城二十八宿の枢要としての七宝瀧寺と法燈派の禅僧との関わりが見いだせる点、興味深い。二十八宿で言えば、鳴滝山円明寺(鳴滝不動)と大福山千手寺(現日蓮宗本恵寺。直川観音)が法燈派との関連で知られるが、粉河寺・興国寺を軸とした中世紀州の宗教文化史を解明するためには、和泉山脈山麓地域の南北にわたるさらなる調査と検証が不可欠であろう。小稿が点描した粉河寺縁起の中世的再編に関わる動きも、その圏内で生じたに違いないからである。

(和歌山大学准教授)